

興福寺中門址の発掘調査

法相宗大本山 興福寺
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

はじめに

興福寺では、『興福寺境内整備構想』にもとづき、旧境内の主要堂宇地区において、中金堂、中門、回廊、南大門、およびその周辺地区を対象とした遺構の整備をすすめることになりました。その一環として、10月2日より、中門跡の発掘調査をおこなっています。調査面積は、841.5㎡です。興福寺境内での伽藍中枢部の本格的な発掘調査は、今回がはじめてのことです。

(1) 中門の歴史

興福寺は、天智8年(669)藤原鎌足の妻であった鏡女王が、鎌足のつくった釈迦三尊像を安置するために山階(やましな)寺を建立したことにはじまります。藤原京への遷都にともないこの寺も飛鳥に移り、厩坂(うまやさか)寺となりました。さらに平城京への遷都によって、藤原氏の氏寺として京の東北端、左京三条七坊の地に創建され興福寺となります。

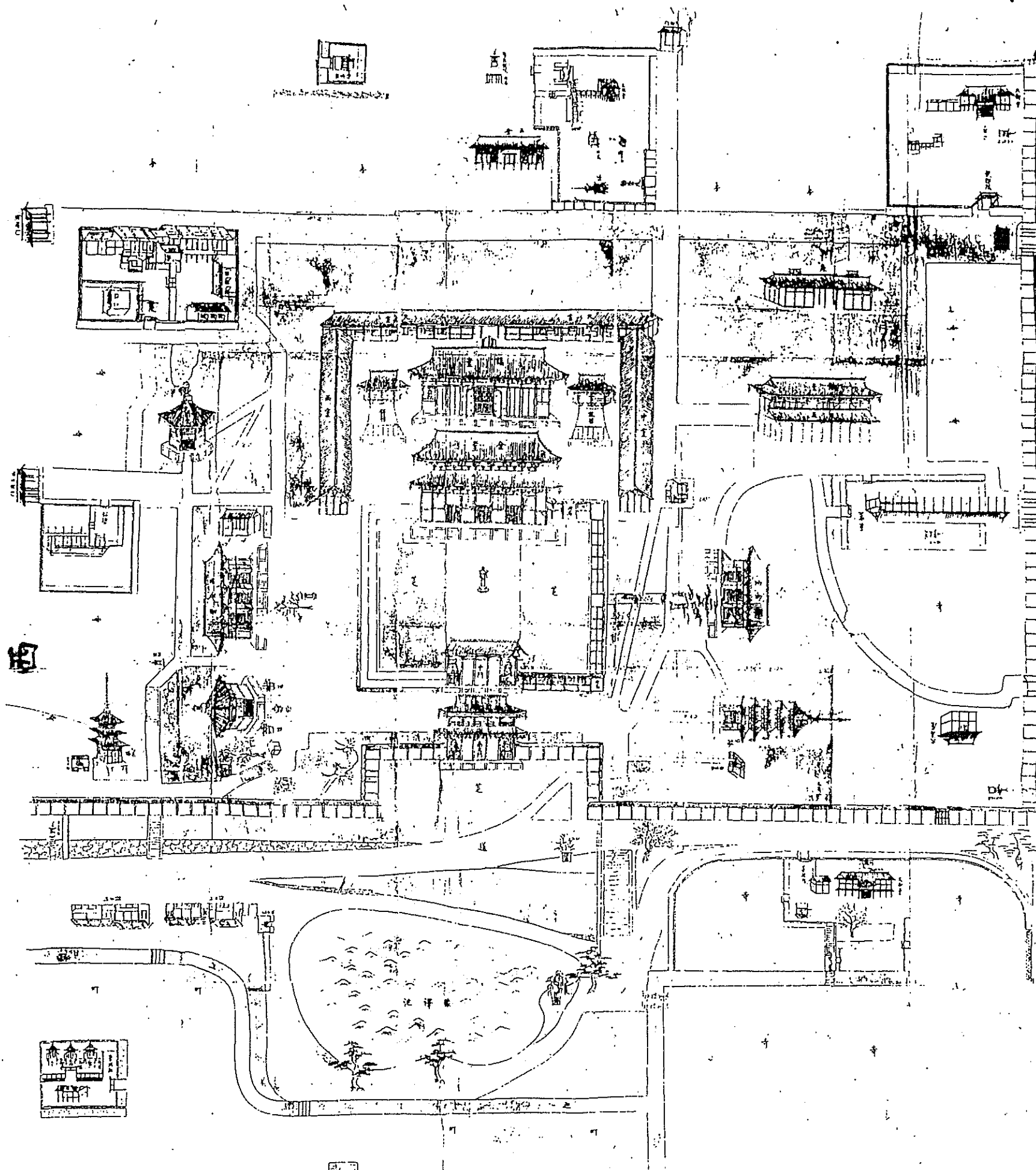
中門の建立は記録にありませんが、中金堂の建設とともに遷都後まもない和銅年間から養老年間の頃であろうと考えられています。養老5年(721)には北円堂が、神亀三年(726)に東金堂、天平2年(730)に五重塔、天平6年(734)に西金堂、天平18年(746)に講堂がつくられ、天平年間には中心伽藍の姿が整います。やや遅れて平安時代の弘仁4年(813)には南円堂がつくられました。これらの建物のうち、中門と中金堂を結ぶ回廊に囲まれた区画を中金堂院と呼んでいます。

平安時代以後、この中金堂院に限ってみても、永承元年(1046)の火災を最初に7度の火災に遭っています。特に有名な出来事は、平安時代の末、治承4年(1180)の平重衡による南都の焼き討ちです。興福寺では、火災のたびに再建を重ねてきましたが、江戸時代の享保2年(1717)に起こった7度目の火災ののち、中門は再建されることなく、明治時代には、基壇の中央に参道がつけられ、その東西は芝地となっていました。

(2) 中門の建築

中門は、回廊の正面中央に開く門で、寺院の正門である南大門とともに「仏門」と呼ばれました。興福寺の中門がどのような建物であったのかは、古図や文書などの資料からうかがい知ることができます。

これによれば、中門は、南大門とほぼ同規模の基壇のうえに、柱を東西に6列、南北に3列、計18本備えた五間二間(柱と柱の間を「間」と数えます)の建物でした。重層(二重)の南大門に対して、単層(一重)で、屋根は切妻造りであったようです。正面五間の中央の三間を扉とし、南と北の面には中央3間分の幅の階段がつけられていました。



216.51
66
2-2B

興福寺伽藍春日社境内繪圖
室永五年五月日
奈良家傳

回廊は、この中門と中央の筋を揃えて、東西に発し北に折れて中金堂に東西から取り付いていました。薬師寺と同様に、中央に蓮子窓を備えた壁をもうけ、両側は柱が立ち並ぶのみの吹き放しの通路となる「複廊」と呼ばれる形式の建物でした。

(3) 発掘調査の成果

① 建物・基壇規模

中門の礎石は花崗岩で、基壇の上に3基が残っていましたが、他はすべて抜き取られていました。現存する礎石の大きさは上面で1.2×1.2mをはかります。

これらの礎石または抜き取り穴から推定される中門の建物規模は、東西23m(78尺、尺は天平尺)、南北8.4m(28尺)で、桁行き5間、梁行き2間に復原できます。柱間の寸尺は、桁行き中央3間が16尺等間と広く、両端間が15尺等間、梁行きが14尺等間となります。

基壇は、その平面の規模が東西27m(92尺)、南北14m(48尺)に復原できます。

回廊の礎石は、1基が残っており、他は東西合わせて8基の抜き取り穴を確認しました。回廊の建物規模は、南北7.1m(24尺)、梁行き12尺2間等間、中門取り付け部の桁行き2.6m(9尺)、西の桁行き4m(13.5尺)となります。基壇幅は、10.6m(36尺)です。

② 基壇および基壇外装遺構の時期変遷

発掘調査の結果、以下のような各時期の遺構が確認されました。

A 創建期

基壇中心部の基壇積み土、礎石のうち据え付けられた部分を確認した1基、東の端間に安置された従鬼(夜叉)像の台石があります。台石は、表面に円形の穴を2つ穿った花崗岩で、基壇に据え付けられた状態で発見されました。上面は60cm×30cm、穴は径11cm、深さ20cm、心々間が27cmで東西方向に並んでいます。これと同様の穴をもつ石がもうひとつ、基壇の西側で地表に転倒していました。

中門には、二天像(持国天と増長天)と8体の従鬼(夜叉)像が置かれていたことが知られています。台石の位置からすると、この台石は従鬼像のうちの一体のものであり、台石が像の両足の芯木を受ける穴をもつことを考えると、像は塑像で、台石は奈良時代(創建時)に遡る可能性があります。奈良時代の門に安置された像の台石が確認された例としては、薬師寺中門の仁王像の台石が知られています。

B 平安時代

基壇の外周において、現在確認される最も古い遺構は、基壇北側の凝灰岩地覆石列と、階段の出にあわせて幅54cmに玉石を3列敷きならべた東西妻までの犬走り、その外側に直線的にめぐらした幅40cm玉石敷きの雨落ち溝です。さらに雨落ち溝の側石の外側に幅66cmの玉石敷きがめぐります。土層の断面観察の結果、これらは一連の仕事であり、据え付けの掘りかた埋土には焼け土を含んでいました。

また、中門から回廊内に入った北7mの地点において、土師器の小皿を20枚前後まとめて埋納した地鎮めのまつりの跡が発見されています。これらは永承の火災の後の再建に伴うものと考えられます。

次に、雨落ち溝の側石、外周の玉石敷きの一部を抜き取り、凝灰岩切石を据えています。これらは、治承の大火後の建久の再建時の仕事である可能性があります。

C 中世以降

基壇の最も高く残っているところでは、小石・焼け土・土器や瓦を含む土を用いた基壇の積みなおしが確認され、その上には凝灰岩による金剛欄の地覆石や、東側回廊棟通りの地覆石の痕跡が残っていました。

基壇の周囲では、花崗岩による基壇化粧がおこなわれました。また、外周の凝灰岩切石列の上に、さらに大きさの不揃いな玉石を用いた石敷きがつくられています。このように花崗岩をもちいた仕事は、東金堂の基壇のありかた等とも照らして、応永の再建時に対応する可能性があります。

なお、基壇の南縁に、切石を用いた石列があります。これらは花崗岩の基壇外装を抜き取った後に設けられており、享保の火災後に据えられたものでしょう。

④ 出土遺物

出土した遺物の大半は瓦です。調査区内の数箇所より、複数の時期の瓦溜りを検出しています。また、焼け土を含む整地土の中からは土器も出土していますが、その多くがいずれも小さな破片になっています。

この他に、銅製の飾り金具・鋌が出土しました。飾り金具は、直径12cmの円形で、厚さは2.5mm程、4単位の宝相華文を表現しています。

(5) まとめ

① 基壇上で確認した礎石の位置は、創建当初のままの可能性が高く、これまで文献・絵画資料、および地表からの観察にもとづいて検討されてきた中門の規模を、発掘調査によって確認することができました。また、興福寺の度重なる再建の特色のひとつに、奈良時代とほぼ同じ規模を踏襲して、それぞれの建物の復興を行ってきたことが指摘されてきましたが、今回の調査で礎石の位置が確認され、そのことが裏づけられました。

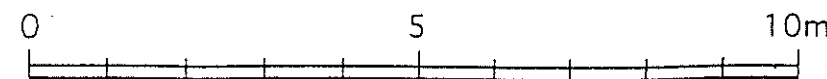
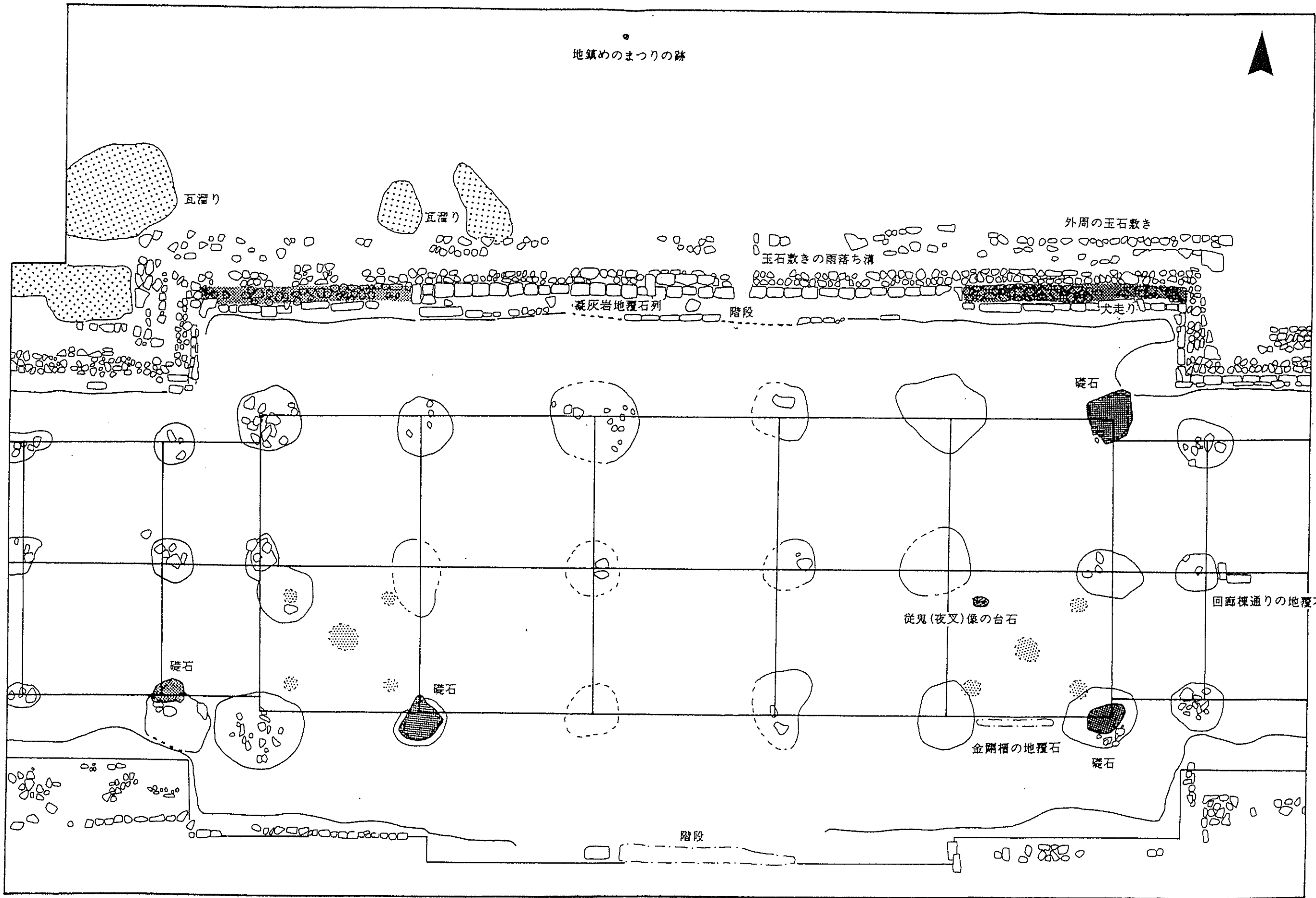
② 基壇の外周において、数回におよぶ基壇外装の重複を確認し、年代の推定できる再建の様子をうかがうことができました。

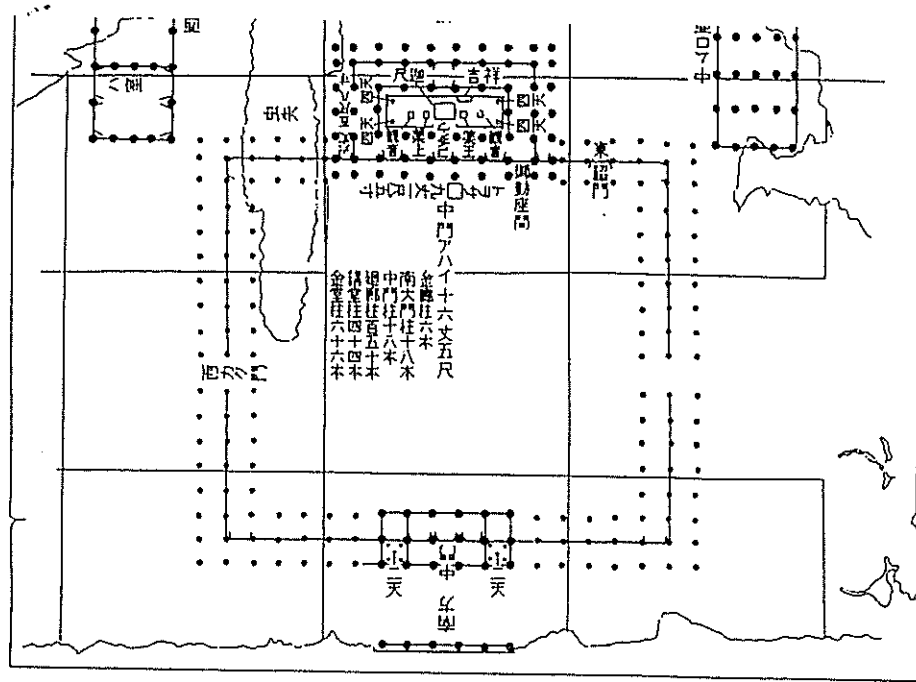
③ 従鬼(夜叉)像台石が当初の位置で発見されたことは、中門に安置された像のありかたを検討するうえで重要な材料となると考えられます。

(付) 興福寺中金堂院の罹災と再建

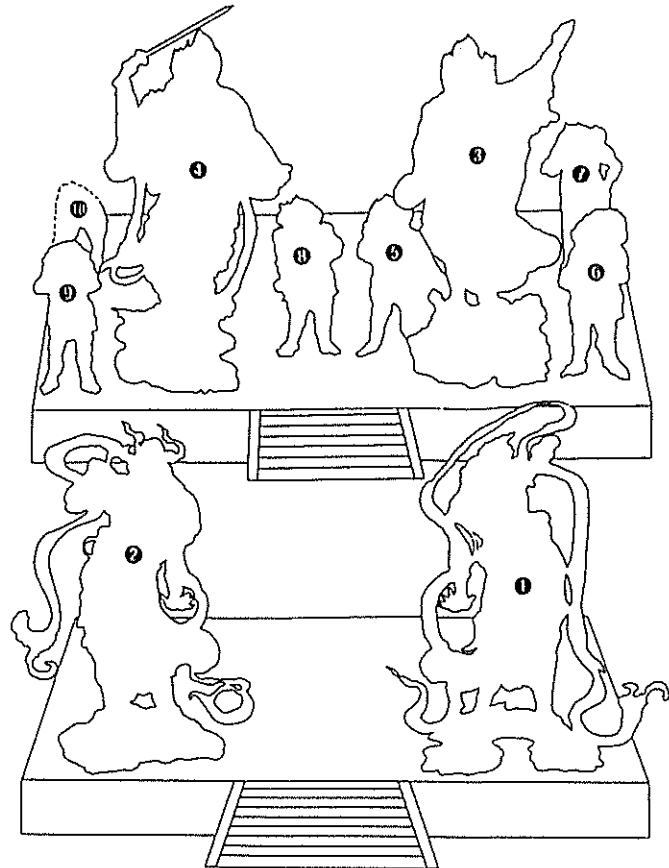
罹 災	再 建
永承1年(1046)12月24日 類焼	永承3年(1048)3月2日 供養
康平3年(1060)5月4日 焼失	治暦3年(1067)2月25日 供養
永長1年(1096)9月25日 焼失	康和5年(1103)7月25日 供養
治承4年(1180)12月28日 兵火	建久5年(1194)9月22日 供養
	中門・回廊は承久4年(1222) (『春日神社文書』)
建治3年(1277)7月26日 雷火	正安2年(1300)12月5日 供養
嘉暦2年(1327)3月12日 放火	応永6年(1399)3月11日 供養
享保2年(1717)1月4日 焼失	文政2年(1819)金堂仮再建

地鎮めのまっりの跡



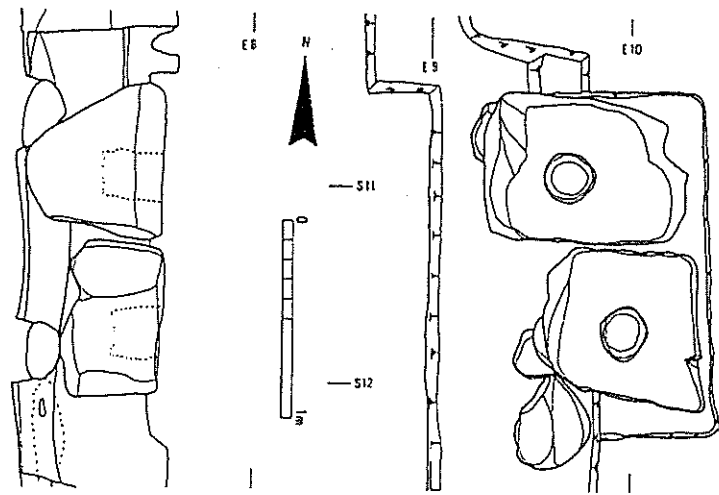


『肝嬰絵図類聚抄』中金堂院図

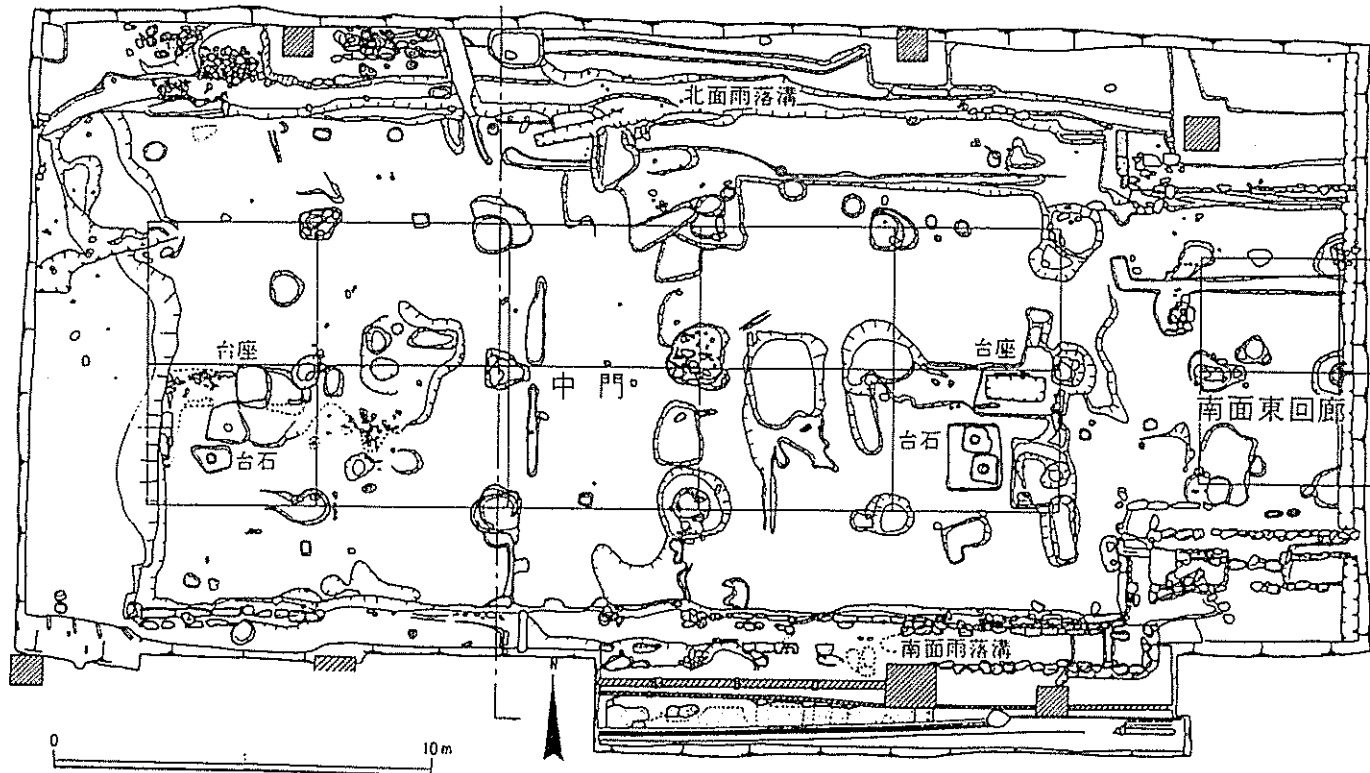


- ① 南大門・中門
- ① 金剛力士立像。阿形。岩座。右手下方に伸腕して五指を伸ばす。左手上方に屈臂して拳。
- ② 金剛力士立像。吽形。岩座。右手上方に屈臂して拳。左手下方に伸腕して五指を伸ばす。
- ③ 二天王立像。岩座の上の鬼形を踏む。右手腰横、印は不詳。左手上方に伸腕して拈拵らしきものを執る。怒髪。
- ④ 二天王立像。岩座の上の鬼形を踏む。右手上方に挙げて剣。剣身は一部補筆。左手腰横、拳を手前に向けて第3・4指を伸ばすか。他の指は不詳。怒髪。
- ⑤ 鬼形立像。手の動き不詳。補筆が多い。
- ⑥ 鬼形立像。両手で箱状のものを捧げ持つ。
- ⑦ 鬼形立像。右手棒杖。左手腰横で拳。
- ⑧ 鬼形立像。右手下方に伸腕して拳。左手不詳。蛇を上半身からませる。
- ⑨ 鬼形立像。両手で香炉を捧げ持つ。
- ⑩ 鬼形立像と思われるが、上半身欠。

京都国立博物館 『興福寺曼荼羅図』



二王像(東)台石平面・断面図



一 南中門一基、長五間、各別一丈五尺、實字肥長七丈八尺、廣二丈八尺、在四王二扉從東入口、實字肥延層記同。上二犯深繪甘用、金泥被從鬼各四口云云。四方各小門二門、實字肥云、延層記云、小門八口云云。

○ 中門

東持國天 西増長天 八夜叉 各立像
各長一丈四尺五寸 各八尺五寸

右各應永年中、春日大佛師成慶造之。

興福寺流記



南大門・中門(外)

京都国立博物館蔵『興福寺曼荼羅図』